

『金閣炎上』と『金閣寺』 『金閣炎上』の吃音を中心に考える

孫 暘

要 旨

1950年日本の金閣寺放火事件，震惊了日本。而后各大新闻媒体相继报道，日本作家三岛由纪夫、水上勉也以其为题材创作了虚构性的《金閣寺》和非虚构性的《金閣炎上》。值得关注的是新闻媒体避而不谈的犯人的口吃问题，却在《金閣炎上》中被详细的论述。为了探究水上勉的真正意图，本文以对《金閣炎上》中主人公的口吃描写分析为主，同时与《金閣寺》中的口吃描写进行对比，深度探讨水上文学的主人公造型方法以及水上文学观。即对贫穷的弱势群体的关注、对人性本质的赤裸展现。以此论证只有向人性深处执着挺进的文学，才能历久弥新，彰显文学本色。

キーワード…… 『金閣炎上』 『金閣寺』 吃音 裸形 人間の本質

はじめに

1950年(昭和25年)7月2日未明、金閣寺が炎上した。各新聞社は、次々にその報道を行った。また、この事件を題材として、三島由紀夫は、1956年1月から10月まで『新潮』に小説『金閣寺』を連載した。そして、水上勉は、1962年9月に『五番町夕霧楼』を刊行し、さらに、1979年7月からは「二十年越しの執念」で『金閣炎上』を発表した。

『金閣寺』と『金閣炎上』の両作品を読むと、ただたんに、金閣寺放火事件の原因を究明しただけでないことが感じられる。水上は、林養賢の放火の動機を中心に、幼友達を遊女に仕立てて、放火動機を暗示させる手法で『五番町夕霧楼』を書いた。それなのに、次は、同じ題材を用いてノンフィクションといわれる『金閣炎上』を書いた。『金閣炎上』では、林養賢のありのままの生き様を描いた。貧困、劣等感、孤独などを背負って生きている社会的弱者の林養賢の姿を中心に描いている。ノンフィクションといわれるこの作品において、私は否定的、また肯定的に論ずる考えはなく、水上が何を言わんとしたのか、また文学としてどのような意義や価値があるのかを考察したい。そのためには、三島の『金閣寺』と比較することも必要なことである。

『金閣寺』の先行研究は数が多いが、『金閣炎上』となるとその数は少ない。1979年の饗庭孝男の「文化と歴史の宿命 - 水上勉『金閣炎上』」¹⁾や2008年の榎本隆司の「水上勉『金閣炎

上』²⁾を見ても、放火事件の真相、母子関係、父子関係、金閣寺の裏面、また、水上が宗教を問題にしていることは論じている。しかし、「吃音」を中心に論じたもの、吃音が林養賢の心理に与えている影響、また、社会や家庭環境が吃音と関係していることについて研究したものは殆どない。まして、吃音の背後に潜む人間の本質を突いた論もない。

現在の日本では、吃音障害者の不登校の問題、吃音障害者の相談や、吃音障害の矯正に対応できる医療機関が少ないというのが現状である。水上は『金閣炎上』で調査した事実はたくさんあるが、その中でも「吃音」を非常に重視している。水上は犯人に対する道徳的な批判はさておき、単純に林養賢の心理を明らかにしたのではないかと考える。その水上の目的は何か。

新聞報道などは、犯人が吃音障害者であることについて何も書いていない。新聞報道などと文学作品との相違は何か。また、当時の新聞報道およびその後における雑誌などの記事の取り扱いを見てみたいと思う。それを時系列に、各新聞社および雑誌社ごとに整理すると、表³⁾を見て分かるように、林養賢の悪行、母志満子の自殺、国宝焼失などの放火事件の重要なことは書かれている。だが、申し合わせたかのように、林養賢の吃音の放火事件に対する重要な事実を見落としている。報道されなかった林養賢の吃音などの重要な事実は、『金閣炎上』の中に詳しく現われている。それと、三島の『金閣寺』における吃音に対する描写と比較して、相違点と類似点を考察したい。さらに、新聞報道などと文学作品との相違は何かについても考察したい。

そこで、まず、吃音とは何かについて論じたい。次に、水上は林養賢が吃音から逃げられない宿命に触れ、家庭や社会などの環境の影響に注目しながら、人間の内面を明らかにしようとしていることを述べたい。さらに、水上は吃音による林養賢の劣等感と孤独を描写しようとしたこと、また、障害者が劣等感から抜け出す努力について描写しようとしたことを考察したい。最後に、『金閣寺』と比較し、林養賢の《愚》と溝口の《智》について論じたい。水上と三島の創作方法は違っても、どちらも人間の内面を明らかにして日本社会の裏にひそむ陰湿や暗い情念を書いている。こうした考察をとおして、水上文学の独自性を明らかにしたいと思う。

1 吃音障害

まず、『金閣炎上』のモチーフについて触れてみる。水上は、なぜ吃音について関心を持ったのか。まず、その「吃音」とは何かを検討してみよう。

水上は、『金閣炎上』のモチーフを「あとがき」で次のように書いている。

私は訪ねた先を、なるべく、そのままかくさずに出した。わからぬところはわからぬままにして、わかったところはなぜそうなのか、証言を得ることができたのである。それゆえ、事件についての事実の八分どおりは書けたように思う。書き終えて、安岡村にある林

養賢君とご母堂の墓に詣った時は、ひそかな感動を覚えた。事実の経過を書き得て、ほっとしたと同時に、林君に捧げたい鎮魂の思いもいささか達し得たと思った。⁴⁾

この文章から注目される点を大きく三つに分けることができる。一つは「わかったところはなぜそうなのか」ということを解明するために本作品を書いたこと。二つ目は、その解明に20年の歳月をかけて、「八分どおり」の事実の調査と分析をしたわけであるが、それは、どのような動機と興味や関心を持って行なったのか。三つ目は、なぜ林養賢のために鎮魂しようとしたのか。私は以上の疑問を持って『金閣炎上』の考察を行う。

水上は、どのようにして「わかったところはなぜそうなのか」ということを解明したのか。この疑問を解くために、まず、「八分どおり」の事実を見てみよう。「事実の八分どおり」とは、林養賢の成長、経験、家庭環境、母子関係、父子関係、住職との関係、そして、時代背景として戦争、食糧問題、南京政府事件、また、金閣寺の拝観収入、金閣寺徒弟の記録などである。また、水上が自らの禅寺の侍者の体験から金閣寺の歴史と文化を説明しているところもある。

次に、「八分どおり」の事実の中で、水上は、林養賢の吃音について、多くの頁数を割いて様々なことを書いている。私は、その吃音の叙述に注目して、水上が抱いた関心が何かを明らかにしたい。また、三島の『金閣寺』における吃音についての描写と比較して、水上の主人公の造型方法について検討したい。

吃音とは何か。多くの文献などによれば、吃音とは「話をするときのためらいや、つまずき」と定義されるが、これでは不十分であると思う。以下は、吃音の病理について詳細に論じたものである。

吃音は音・音節の繰り返しや引き伸ばし、阻止(ブロック)を特徴とする発話の流れ(流暢性)の障害であり、アメリカ精神医学診断マニュアル(DSM-IV)ではコミュニケーション障害の1型に分類されている。⁵⁾

Albert Murphy(アルバート・マーフィー)⁶⁾によれば、「吃行為は、本来、口腔機能に最も著明に現れる、精神的に動機づけられた徴候である。きわめてしばしば、吃りは、意識下における混乱や、疑い、不安、無力感のあらわれである。」⁷⁾

吃音は、ドイツのクスマウルが唱えた「ケイレン性調節神経症」といわれ、ことばを調節する器官が先天的に弱いため、発音するときや、発音の途中でわずかなことでも発音筋がケイレンするとする説が正しいようだ。その幼少時の原因としては、六つ挙げられていて、感染、心理的ショック、病気、肉体的ショック、欲求不満、環境となっている。⁸⁾ 病理学的に見ると、吃音は生理から心理までの障害だと考えられている。生活環境、心理面

や健康などが吃音の形成に大きな影響があるようだ。そして、人の性格や心理も影響している
と考える。

吃音について検討・考察を行ってみると、私は、水上が林養賢の劣等感の象徴として吃音を
捉え、その障害が林養賢の人間形成に大きく作用していると考えて、それがために世間との交
流を絶つことになり、孤独感を深めて行ったと考えたのではないかと受けとめている。ひいて
は、そのことが金閣寺の放火に結びついたのではないか。水上が不幸を背負って生まれた主人
公に対して精一杯の愛情を注いで調べて上げ、一人の青年の生き様を書き記していると考え

2 吃音から逃げられない

ここでは、水上と林養賢の初対面を振り返って、「圧迫感」について検討したい。そのために、
水上の吃音の叙述を分析してみよう。水上はなぜ吃音について病理的な解説を引用し、また、
養賢の父道源および母志満子の家庭を紹介しているのか、その目的を解明したい。

水上は、金閣寺放火事件を始めて知った時、犯人とされる林養賢の行為であるとは、とても
信じられなかったようだ。水上はどうしてそのように思ったのか。水上は、1944年(昭和19
年)に京都の相国寺塔頭の小僧だった頃の養賢との初対面について次のように述べている。

帽子の阿弥陀からのぞいた顔ぎわはへんにせまく、くちびるのあつところと、眼尻の
つりあがった感じがかすかな圧迫感をつきつける。⁹⁾

炎上した金閣は徒弟林養賢によって放火されていた。私は絶句した。¹⁰⁾

ここから、放火犯人と新聞報道されている林養賢と、水上が初対面した際の林養賢との印象
が、水上にはどうしても合わなかったことが読み取れる。特に、「圧迫感をつきつける」という
記述に私は注目した。この「圧迫感」とは何なのかを解明するためには、養賢の吃音を軽視す
ることはできないと考える。また、なぜ、新聞報道が水上を興奮させ、緊張させたかを検討し
よう。

水上は、どのように吃音について注目しているか。養賢の吃音障害について発見された年齢
から叙述し始めている。

三歳の頃から養賢はどもりはじめた。三歳の何月ごろかはわからぬが、志満子が事件発
生後、西陣署員の訊問に応じた調書にそれが出てくる(中略;筆者)三歳からは、養賢が
まがりなりにも、人まねで物がいえるようになったころだろう。物言わぬころから、吃る
根が育っていたとみてよい。¹¹⁾

このことから、養賢の吃音は生まれながらのもので、それが三歳の頃になってようやく発見されたことが分かり、養賢の悲劇的な運命が暗示されていると考える。

養賢の吃音障害について、もっと深いところの悲劇は何か。水上は、鏑木良一（日本吃音科学研究所長）の説を引用している。環境の面では、のんびりした家庭では少なく、暗い家に多いとし、中でも夫婦喧嘩が絶えない家庭を重視している。この暗い家庭環境で、まさに養賢は育ったのであろうということを示唆している。

肺結核だったにしても、道源和尚に性欲がなかったわけでもあるまい。不治の病をもちながら、三十前の僧が妻を迎えたのだ。病身では何かと寺の経営も行き届かない、身のまわりはともかく、田畑の守りはしてほしかったのである。それに早く子を産んでもらって、その子に寺を継がせたい願いもあったろう。子が生れても貧乏寺は継がせる意志はなかったにせよ、禅派のどこかの住職にしたい夢はなかったとは云い難い。志満子が不妊の体質でないかぎり、結婚は、そのような夢をはらんでいて不思議ではない。だが、志満子は三年間懐妊しなかった、志満子に子を望まぬ気持があったか。詮索は自由だが、病夫の子を産むことへの思いを、複雑にうけとめていたことは想像しうる。¹²⁾

このように、養賢が、特別な家庭環境で生まれたことを明らかにしている。父道源は、肺病者、また貧乏寺であったということで心理的に追い込まれていた状況を踏まえると、道源は自分の望みをすべてわが子に託したかったのであろう。また、妻については子を産む道具だけであり愛情がないことが想像できる。

養賢の家庭環境を叙述した水上は、母志満子について詳しく書いている。志満子の少女時代の家庭環境から、最後に自殺したことまで書いている。なぜ、そんなに詳しく書いているのか。それは、読者に対してどうしても疑問を持たせておかなければならないと考えたのだろう。養賢と母との関係がかなり重要だと思う。水上が志満子をどう捉えているか。そして、何を明らかにしたかったのであろうか。

道源の肺結核は、仲人口にはなく、病身だぐらいいきてきたらしかった。結核は当時は死の病だった。いまの癌ほどおそれられた。二十四歳の娘が、そんな僧が待っていると知らず、紫に花柄の銘仙地の着物に、黄色い名古屋帯をしめて、トランクと日傘だけもって、海ぎわに立った姿には、孤独で気丈だった性質もあらわれている。¹³⁾

24歳で寺に嫁いできた志満子は、辺境の地、成生で生活を始めたのであるが、幼時は勝気で、学校では誰にも負けないほど気が強く、成績もよかったから、将来に対して希望を抱いていたであろう。その志満子が、養賢が生まれるまでの結核患者道源と過ごした5年間は、希望がそ

ぎ落されて行った歲月だったろうと水上は書いている。志満子の実家、性格、恋愛、見合、婚姻、避妊知識、妊娠なども紹介しているので、絶望的な生活を必死に生きている女の面目を想像することができる。結核をわずらっていた夫道源の性具、看護婦役、農業従事者、そして性格は勝手に高慢、律義、虚栄心、孤独で気丈の女性だったことが書かれている。また、父道源が病床にあったのでわが子養賢に対して思うように愛情を注ぐことができなかつたことを想像することができる。そして、このような夫婦が、しょっちゅうのしり合っていたであろうと思われる。だから、水上は「物言わぬころから、食べる根が育っていた」のであると書いている。そして、「三歳から吃りだった子を矯正し得なかつたことは確かである」¹⁴⁾とも水上は推察した。水上はこのようにして養賢が、このような家庭環境から負の養育を受けて、やがて青年期に入るのであるが、吃音の矯正が厳しくなり、志満子との言い争いが絶えなかつたことを書いている。

以上、水上が吃音に注目した目的について検討した。水上はこのようない連の叙述を通して、養賢の吃音から逃れられない宿命を暗示したものと考える。養賢が吃音を矯正し得なかつたばかりでなく、心さえも貧しくなっていくさま、孤独を深めていく様子を見据えている。養賢の家庭環境、両親の夫婦関係、母子関係などの多くの事実を書いて、養賢の吃音が不可避であったことを明らかにした。養賢が生まれながらにして悲劇の運命を背負わされていたと考えたのではないか。

3 鎮魂

前章の2では、林養賢の吃音が宿命的だったことを明らかにした。それではいったい水上は、吃音と養賢の性格をどのように関係づけようとしたのか。また、吃音の背後に何が隠れているのか。吃音は養賢にどんな影響を与えたのか。これらの点について検討し、考察しよう。

まず、養賢の吃音について、具体的に書き記している点が注目される。養賢の話し方について、全て吃音を改めることなく紹介している。水上は養賢の吃音の側面に注目したと考える。それも、吃音障害者が本当に話しているような正確性を持たせているが、その理由は何か。

こ、こ、こ、この地蔵の台やかて、ろ、ろ、ろくにんとも、目が欠け、鼻が欠けとる。仏さんでさえ、か、か、か、欠けたところがあるのに、わ、わ、わ、わしが、ど、ど、どもるぐらいはあたりまえや。¹⁵⁾

だ、だ、だれになるたいいうほどのことやないんですわ。ま、ちょっとぐらい吹けるていで、け、け、けど、うちにおいといたってしゃあない思うて、もってきたんです。¹⁶⁾

吃音の特徴は、語頭の音を引き伸ばすようになり、最初の語頭が出にくい難発になることが現れている。水上が吃音について深い研究を行ったのであれば、このような小さい細い点に気づくことはできないと考える。また、このような直接的な表現は、生々しい状景を描写しているだけではなく、水上が重要視しているのは、養賢の交流し難い苦痛を示して、読者に注目させていると考える。

このような吃音障害を持って少年期に達した養賢が、どのような生活を送っていたのであろうか。水上是、孤独と劣等感にさいなまれていた養賢が、なんとかそれらを払拭したかったであろうことを書いている。

土蔵へ入って内側から錠前をおろされればどうにもならぬ。声かけたとてあけてもらえぬでは、つきあう道は絶たれるのである。養賢の幼少年期の実像が、この話で、かすかではあるが浮きあがる気がした。¹⁷⁾

ここには外部と遮断し、孤独を深めて行った養賢が描かれている。そして、自分しかいない狭い世界に引きこもっている。養賢は吃音のために、外界と交流することが殆どできなかった。潜在的意識的な反応としては、内面の焦燥、恐慌、不安、強情、劣等感、現実からの逃避などを感じられる。欲求が満足できないことから生じる人間嫌悪の中でも、とりわけ悲しむべきものとして真剣に追求したのは、人間の無慈悲さ、冷酷さであった。

以上、水上が吃音に注目した理由について検討した。水上是吃音障害者である養賢の劣等感、孤独感を表したと考える。しかし、人は誰でも善と悪、長所と短所、智と愚などの二面性を持っているし、また、一つやふたつの劣等感などがあるのは当然である。それが人間である。「養賢の吃るのは、一気に直せいうてもなおらんわ。吃るのも人間、吃らぬのも人間。人みな一つ二つの欠点はあるが。養賢のいうとおり、顔欠け地蔵がそれや」¹⁸⁾。吃音障害など何のことはない、「養賢君、なぜ負けたのか」と水上是叫びたかったに違いないと想像することができた。だから、養賢が劣等感から抜け出す光明の欲求も見える。それが「吃りの歌上手、読経だけは吃らぬ」の記述である。希望を失っては人間は生きて行くことができない。どんな劣等感があったとしても、何かひとすじの希望の光があるはずであるということを水上是書きたかったのだと思う。水上是貧しい生活の弱者が、劣等感と闘いながら生きたことを表そうとしたことが分かる。そのことは、養賢が「読経」と「尺八を吹く」ということから希望の光が見えたところから明らかである。養賢の劣等感と欲求が良くも悪くも人間の本性であることを示した。水上是「死んだあの人に冥府へ提灯の一つもたせてあげたつもりである」¹⁹⁾というところで『金閣炎上』を完成させ、当初の創作目的を果たしたのである。

4 愚と智

ここでは、『金閣炎上』と『金閣寺』を比較して相違点と類似点について検討したい。また、水上と三島の創造方法と作風が違うことを明らかにしてみよう。そして、両作品の「読経」についての描写を比較して主人公の造型方法を考察したい。

水上の『金閣炎上』は1979年に書かれたが、それより以前の1956年に、水上と同じ林養賢をモデルにした『金閣寺』が三島由紀夫によって書かれている。『金閣寺』があるのに、水上はなぜ『金閣炎上』を書いたのか。水上も三島も、主人公の吃音について注目しているが、水上の『金閣炎上』と三島の『金閣寺』とは、大きな差異があるのか。創作方法が異なる両作品から、どんな主人公像が浮き出ているのか。両作家の目的は何であったのか。私は、このような疑問を持って考察する。

水上は、林養賢と故郷が近く、舞鶴市で教員をしていた頃、養賢に会ったことがある。創作するに当たっては、各方面に精力的な取材を重ね、ノンフィクション『金閣炎上』として、若狭の寒村、成生の禅寺の子として生まれた養賢の生い立ちから事件の経緯、養賢の死までの事件の全貌を詳細に書いている。水上は金閣炎上に関するだけでなく、養賢の生き方について、実に多くの証言や記録を参照して書いている。ノンフィクション形式の本作品は、外部を著す材料として、『供述調書』、『精神鑑定書』、『問答速記録』、『公判記録』、『鹿苑寺徒弟記録』、『昭和史の天皇』などの資料によって、間接的な経験を言語で直接的に表現している。そのようにして養賢の内面が明らかにされていった。本書の場合は、あくまでも現実にかかわっているだけに、金閣寺の美とともに世相の深い影を見ていると考える。そして、水上が諦念を底に秘めて生き続けたと考える。

一方の三島は、林養賢と会うことはなく、小説として虚構した。そこには、三島自身の人生に対する悲哀の情から生まれた愛情があるのではないか。そして、自己愛の延長上に登場人物がいるように思われる。三島自身を主人公溝口に同化させて、見えない内面を虚構して自分の思想を現している。したがって、水上と三島は創作の目的が違うから、小説自体の作風もまた違う。

また、『金閣炎上』の中で「想像」という言葉がよく使われている。第三者的視点による実録小説の体裁と想像との二元的構成を示している。水上が実録の中に自分の経験を加えたため、事実に基づく描写は読者に考える空間を残すことができたと思う。

一方の三島は、金閣寺放火事件を借りて『金閣寺』を虚構の作品とした。『金閣寺』発表の前年に「小説家の休暇」で以下のように書いている。

一つの事件がある。それが小説の中に、小説世界の内的法則に包まれて存在していることは、まことらしさを失う所以だと考えられる。そこで事件は裸かの形で、無秩序な形で投げ

出されていなければならぬ。さうすれば、小説を読むことの援慢な時間によって、読者が自分の内の体験のうちにその事件をとり入れて再構成し、読者自らが、それにまことらしさを与えることができる。(中略) こういう確信を私は写実主義的偏見とよぶのである。²⁰⁾

ここで書いていることは、『金閣寺』のモチーフと一致している。三島は、この事件を「写実主義的偏見」の視点から書いた。したがって、『金閣寺』には小説としての美が現れている。それは、『金閣寺』で書いた真実、また、三島の感覚器官の印象と経験であると考えられる。『金閣寺』の真実は、作家の偽りのない感情の現れるのであるではないか。虚構の真実は、外の世界では真実ではないが、作品の中で自身の構造関係が成立すれば、それは文学の真実である。例えば、「孫悟空」が、石の中から飛び出すのを虚構と感じている人がいないと同じように、『金閣寺』は読者に想像力の空間を提供した。

ところで、両作品は創作方法が異なるが、類似点もあると思う。『金閣炎上』と『金閣寺』は小説に対する全く異なる姿勢となって現れるが、むしろ、両作品は水上と三島が異なる創作手法を通して詳しく書いて同じ事件を考えている。水上の『金閣炎上』ではノンフィクションとして外部の場面、また三島の『金閣寺』ではフィクションとして内面の心理がそれぞれ見事にかつ適切に描き出されている。

『金閣炎上』と『金閣寺』の吃音についての描写を比較してみる。

どもりやったから、物はある言わん方やった、というて、そないに偏屈者かというともうでもなかったわの。中学二年ごろから、よう寺へもどりなさって、うちらへ経もよみにきてくれやんしたが……道源和尚は、なにせ、ここが(と男は右胸に手をあて)わろうて寝てばかりやったで、養賢さんは十三、四のころから墓経や棚経をつとめなさった。どもりでも経だけはようよめてのう、田井の和尚さんも感心してござったほどでの。²¹⁾

朝課の経のとき、私はいつもその合唱する男の声に、生生しさを感じるのが常であつた。一日のうちでも朝課の経の声は力強いが、その声の強さが、夜ぢゅうの妄念をあたりに吹き散らし、声帯から黒い繁吹がほとばしつてゐるようである。私のことはわからない。わからないが私の声も、同じ男の汚れを撒き散らしてゐると思ふことは、私を奇妙な具合に勇気づけた。²²⁾

これらの引用から分かることは、水上は、養賢が吃音にもかかわらず、読経はどもらないだけでなく、とても上手であることに注目している点である。三島も溝口の「読経」、「英語」ではどもらないことを書いている。なぜ吃音の養賢が読経のときにどもらないことを書いているのか。水上の場合は、穿った見方をすれば、養賢の数少ない長所としてどうしても取り上げ

たかったのではないか。これらのことから、養賢が吃音障害の劣等感を払いのけるために努力して読経をしたということが想像できた。これは人間の本性からくる精神のバランス感覚を示している。ここに、養賢の孤独の《愚》性を感じられる。だから、水上にとって、金閣は単に美の極致ではなく、父と別れ、母に去られて貧困と障害、それと病気を背負った宿命の中で生きて行かなければならなかった養賢の心情の深さを暗示するものである。

一方の『金閣寺』では、「人の見てゐる私と、私の考えてゐる私と、どちらが持続してゐるのでせうか」²³⁾と、主人公溝口の内面世界を明らかにしている。溝口が他者に対して言葉を発するときには吃点を強調している。そこには他者とのコミュニケーションができない主人公という一面が浮き彫りにされている。溝口は吃音者であったが、思想はまともで、頭脳明晰で、感情が豊富な人として描写されている。三島の『金閣寺』は、放火の動機として「美への反感」を取り上げていて、一連の生き活きとした比喩を通して、吃音障害者の内面の焦燥、恐慌、劣等感、残虐などの心理状態を明らかにして、後の犯罪のための伏線として設置している。溝口の吃音障害の特徴は、三島自身の思想を表現する手段になっている。吃音だから、口で表現することができないので心の中で話すのである。溝口は吃音障害者だが、内面的には心豊かであるから障害者でない人よりも、社会や人間のことをよく分かっている。

以上、水上と三島の相違点と類似点を明らかにした。また、両作品の主人公造型をも検討した。同じ吃音障害者でも、養賢が患者で、溝口は智者であるともいえる。ただ、いずれにしても、愚性も智性も人間の本性であることには変わりはない。会話・コミュニケーションができない人間は内界と外界との交流ができない人間であると思うので、内面の苦痛を想像できた。このような人間の内面は孤独でも、愚かでも、人間の真実であると考えられる。これが『金閣炎上』と『金閣寺』の類似点であると思う。三島は空想で人間の内面を書いた。水上は20年かけて調査と分析をして外面から人間の内面に迫っていった。水上文学は、人間誰しもが持つ内面の葛藤や劣等感などの弱点を明らかにしていると考えられる。林養賢の劣等感にさいなまれる人間性と社会に対する怨念の深さを書き記した。また、弱者の内面を代弁し、「若狭に育った貧困な者」の中で、弱者の孤独を理解し得るものにのみ向けられ小説世界であるともいえる。林養賢の愚の生き様と溝口の智の造型からみると、水上と三島の深い創作の目的は同じであると考えられる。美といい、醜といい、善といい、悪といい、それは人間の本質であると考えている。したがって、両作品共、人間の本質、弱者の内面、生存の矛盾、そして、裏の日本を明らかにしたものののではないか。

おわりに

本論文では、吃音を中心として、『金閣炎上』、『金閣寺』を比較し、水上文学の主人公造型方法と水上文学の独自性について検討した。また、水上と三島は創作方法が違うが、基本的目的

は同じであることを明らかにした。

現実の出来事を、できるかぎり現実の形で伝達しようとするれば、そこに文学が入りこむ余地はほとんどないわけであるが、文学である小説は、現実の出来事の性質を失うことなく、別様なものに変形させることができる。そこに、小説としての醍醐味がある。水上および三島の両作家は、新聞報道が記事にしていない、つまり見落としていることを調査、分析して林養賢を再生させようとした。すなわち、小説という手法を使って、金閣寺放火に至った林養賢の心の内面に近づくことを考えたのである。このことは、小説という文学作品における社会的な事件の題材としての役割を考える際に重要な意味がある。そこに、小説の意義と価値を見出すことができる。

林養賢と吃音との関係を水上と三島も注目している。ただ、力点を置くところは違う。例えば、三島は登場人物の性格を設定している。溝口にとっての「有為子」「柏木」「鶴川」の役割を検討する必要があると思う。三島は吃音を金閣寺と性と犯罪に関連させている。溝口にとっては金閣が美の心像なるがゆえに、溝口と女との性交不能におちいるシーンを描写して連続させている。性交とは溝口にとって吃音を打ち消すための手段のようなものだと思う。性交しようとする、美の金閣の幻影が出現するので、不能になった。やはり、金閣を焼かなければならぬと溝口に言わせしめた。三島が溝口の性に対して渴望、恐慌、不安、征服、壊滅などの感じ方を描写して、溝口の内部における美と性的な魅力の関係を暗示したと考える。

水上は、吃音障害者の劣等感、孤独感、矛盾性などについて、既に数十年前に取り上げて問題視していたのである。水上は、当時の氷のように冷たい社会の現実の中での苦痛に対して注目をした。そして、貧しさゆえの薄幸の人生を送る主人公を書き記している。その中には、林養賢だけでなく、水上自身もいるかも知れない。水上は、この作品を通して、社会の貧困、障害などの社会環境下で生きる人間の内面を明らかにした。同じようにもがき苦しんでいる人達が他にもいるのではないか。それは、陰である裏側の社会の現状であることを指摘しているのである。

いささか極端にいえば、『フライパン歌』から、社会派推理小説といわれる『霧と影』、『飢餓海峡』、『雁の寺』、また、自伝性の『凍てる庭』、『わが六道の闇路』、伝記体の『宇野浩二伝』、『古河力作の生涯』、『一休』、『良寛』、そして『金閣炎上』と一貫して水上の一筋の思想が流れている。その一筋の思想とは、貧困者に対しての心からの同情と愛情、そして、人寰への怨念と優しさである。この思想は、水上が少年期に寺から脱走していること、中年期に転々と仕事を替えて一定の仕事に就いていなかったこと、生活が苦しく貧しかったこと、妻に見捨てられたこと、次女が身体障害者だったことなどの苦勞が多かった現実と向き合っていた水上の経験から導き出されるものである。

また、事実は無数にあるから、現実の全貌を捉えることは不可能である。だから、吃音の事実を一つひとつ究明しながら人間の愚、欲、悪、罪をできる限り表現し、また深く読者に把握

『金閣炎上』と『金閣寺』(孫)

させようとしているのは水上の力量である。水上は言葉の力によって、自身の感覚なり、思考なりを様々に反応させながら書き進めている。水上の『金閣炎上』は、林養賢の未知の事実を明らかにし、また、既知の事実新しい光を当てている。

『金閣炎上』と『金閣寺』のように、同じ事件に題材を求めても、そこで扱われるテーマは作者によってまったく違う。小説は、作家の個性が色濃く作品に反映される。「貧困を生きる人間」を注目していること、人間の本質を明らかにすること、裏の社会の真実を示すことなどは水上文学の特徴であると思う。あるいは、水上文学の独自性であると思う。すなわち、道徳的、世俗的批判はなく、ただ単純に人間の裸形で描こうとした。林養賢の行為は善でも、悪でもなく、いずれも人間の本質である。異なる境遇を背負っている人には違う行為があるかもしれない。貧困といい、富裕といい、それは外観だけである。人は誰でも仮面を被って生きている。実は慧能の詩のとおり、「菩提本無樹、明鏡亦非台、本来無一物、何処惹塵埃」²⁴⁾すなわち、外部の仮面を剥がしてみれば、誰も何も持たない。同じような愚、欲、悪、罪などの人間性だけはいつまでも変わらないと考えられる。その人間の裸形を、水上の『金閣炎上』は描き出している。まさに人間の本質を探り当てるために、水上は三島の『金閣寺』、自作の『五番町夕霧楼』後、『金閣炎上』を書いたといえよう。

今後の課題としては、本論文を発展させ、尺八、性について検討すること、また、『金閣炎上』『五番町夕霧楼』『金閣寺』を比較検討することを考えている。

< 注 >

- 1) 饗庭孝男「文化と歴史の宿命 - 水上勉『金閣炎上』」(『文学界』、第33巻第9号、1979、9、212 - 217頁)。
- 2) 榎本隆司「水上勉『金閣炎上』」(『国文学解釈と鑑賞』、第73巻2号、2008、2、183 - 190頁)。
- 3) 金閣寺放火事件の各新聞社の報道内容

新聞報道等の期日	記事の見出し	摘要
1950、7、3 朝日新聞(八)	金閣寺 全焼す 放火容疑者を逮捕 徒弟の大谷大学学生 “金閣と心中の覚悟”自殺しそこねて自供 義満の木像も焼失 破損していた火災報知機 孤独な性格 村上住職の話 勝負事が好き 学友の話 国民的な痛手 上野美術大学長の話 社説:国宝を焼く	逮捕 自殺 報知器 国宝を焼失 孤独な性格

1950、7、3 毎日新聞	放火犯人逮捕さる 徒弟の大谷大学生 国宝『金閣』灰燼に帰す 義満像と佛像五点も “悪いと思わぬ”うそぶく犯人 動機に心当りなし 村上鹿苑寺住職談 故障だった報知器 千万円で復元可能、観光価値も落ちない 村田博士談	逮捕 国宝を焼失 悪い性格 報知器 国宝の復元
1950、7、3 新潟新聞	国寶金閣寺全焼す 運慶の三尊佛など重要古美術品も灰に 容疑者林放火を自供 裏山で自殺図り捕る 犯行は怨恨からか極端な二重性格者	国宝焼失 自殺 逮捕 性格
1950、7、4 朝日新聞(七)	金閣寺雑記 池田亀監 費用と至誠の不足 新村出	国宝 国宝復元
1950、7、4 朝日新聞(八)	金閣放火の責負い、林の母親が自殺 列車から川へ飛込む 母の面会を拒む 四年来一度も会わぬ “美しさ”に反感 林放火の動機を自供 分裂型変質者 内村博士語る 国宝解除か 九割焼失の金閣	母親自殺 自供 変質性格 国宝焼失
1950、7、4 毎日新聞	金閣寺放火の悲劇林の母投身自殺 禅門の身に責任感じ 廿日前から計画 西陣署で犯行を語る林	母親自殺 自供
1950、7、4 新潟新聞	金閣寺放火犯人捕る 裏山で自殺図り苦悶中を発見 林寺僧、犯行を 自供す 性格異端者 犯人林の生たち	自供 性格異端
角川書店 1986、10、6 昭和日常生活史2	金閣寺放火の“動機”わかる	動機
講談社昭和二万日全記 録	孤独な若い僧侶の犯行	孤独性格
2005、6、25 戦後事件史データファイ ル	金閣全焼 一九五〇 ようやく戦後の混乱が収まるうとする一九五〇年、足利義満が建立した金 閣が放火により焼失した。なぜ、役僧は放火することになったのか	国宝焼失 動機
毎日新聞 2000、8、30 20世紀の記憶	同寺徒弟林養賢は睡眠薬自殺をはかり昏睡状態で逮捕	逮捕 自殺

4) 水上勉『金閣炎上』「あとがき」(『新編水上勉全集・第六巻』、中央公論社、1995、9、453頁)。

『金閣炎上』と『金閣寺』(孫)

- 5) 結城敬「わが国における吃音研究と治療の現状」(『精神医学』50巻7号、2008、634 - 639頁)。
- 6) Boston University Professor Emeritus of Special Education Albert T. Murphy, a nationally recognized psychologist and expert in speech disorders, died in Burlington, Mass, on June 26,1998. Murphy served as president of the Mass. Speech-Language Hearing Association and as consultant to Mass. and R.I. Departments of Education and Mental Health, the Joseph P. Kennedy Hospital, the Veterans Administration, United Cerebral Palsy, National Association of Retarded Citizens, the World Health Fund, the Speech Foundation of America, and the U.S. Office of Education, Bureau of Education of the Handicapped. (<http://www.mnsu.edu/comdis/kuster/pioneers/albertmurphy.html> accessed October 2,2008)
- 7) 神山五郎『吃音研究ハンドブック』(金剛出版株式会社、1967、6、145頁)。
- 8) 『金閣炎上』42頁。
- 9) 前書9頁。
- 10) 前書11頁。
- 11) 前書42頁。
- 12) 前書37頁。
- 13) 前書33頁。
- 14) 前書42頁。
- 15) 前書65頁。
- 16) 前書106頁。
- 17) 前書46頁。
- 18) 前書65頁。
- 19) 水上勉『金閣と水俣』(築摩書房、1974、11、220頁)。
- 20) 三島由紀夫「小説の休暇」(佐伯彰一、『三島由紀夫』、日本図書センター、1995、11、52頁)。
- 21) 『金閣炎上』26頁。
- 22) 三島由紀夫『金閣寺』(『三島由紀夫全集6』、新潮社、2001、5、95頁)。
- 23) 前書259頁。
- 24) 水上勉『「般若心経」を読む』(『新編水上勉全集・第二巻』、中央公論社、1996、5、388頁)。

主指導教員(先田進教授)、副指導教員(井村哲郎教授・佐々木充教授)